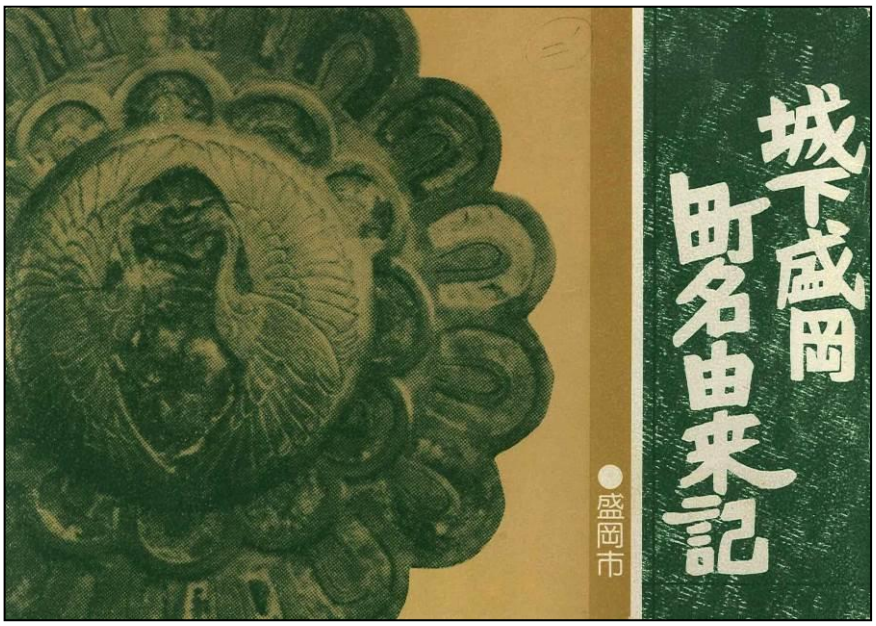
城下盛岡町名由来記（改訂版）



（昭和 54(1979)年発行の由来記の表紙）

※　これは、昭和五十四(一九七九)年に「あすを築く盛岡市民運動実践協議会」が発行（編集　盛岡市）した「城下盛岡町名由来記」の内容について、市が再調査の上、説明文等を訂正し、改訂版として作成したものです。

盛岡市

はじめに

盛岡のまちづくりは、慶長三（一五九八）年の盛岡城の築城と、お城を中心に城下町が開かれたことに始まります。その後、本市は県都として政治・経済などの中心的役割を担い、今日では商業・業務などの都市機能が集積する近代的な都市として発達し、まちの姿も大きく変貌を遂げました。

しかし、明治時代に城郭は取り壊されたものの、まちづくりの中心には常にお城があり、地域の人々の手で磨かれてきた城下町盛岡ならではの魅力が多くの人々の心を引き付けてきました。

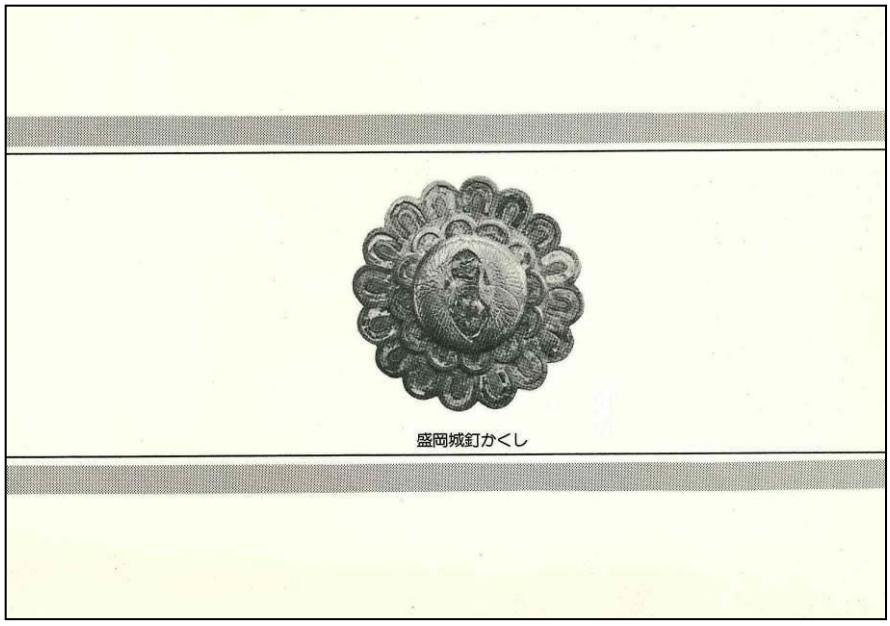
「地名は土地に刻まれた言葉」ともいわれます。

城下町盛岡においても、その歴史を今に伝える上で旧町名はとても重要な役割を果たすことから、「あすを築く盛岡市民運動実践協議会」では、昭和五十四（一九七九）年に「城下盛岡町名由来記」を発行（編集　盛岡市）しましたが、それから三十年余りが経過したこともあり、市ではその内容について、再調査の上、説明文等を訂正し、改訂版を作成することとしました。

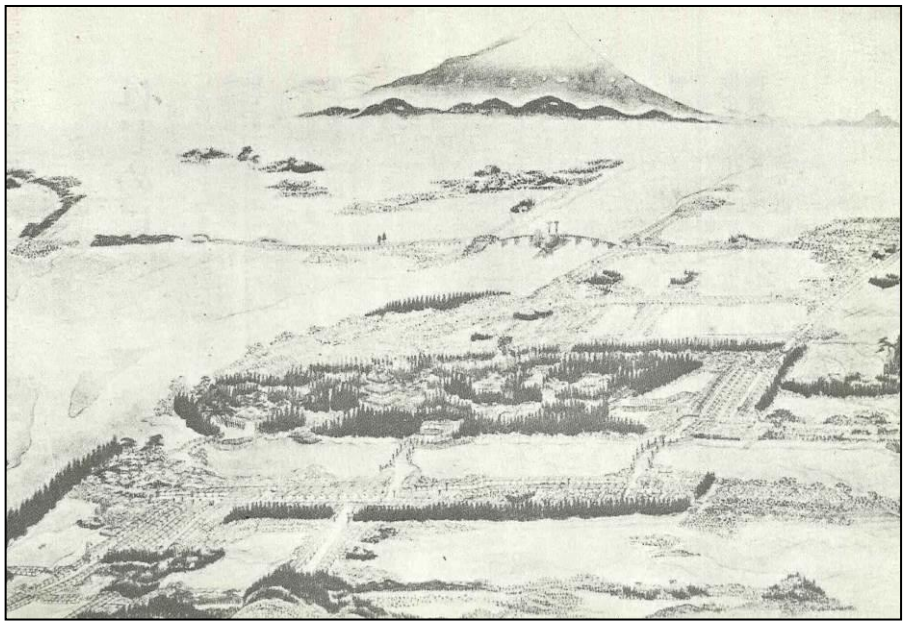
この「城下盛岡町名由来記（改訂版）」が、その由来や歴史を文化的遺産として、後世に伝えていく一助となれば幸いです。

平成二十二年二月

盛岡市長　谷藤　裕明

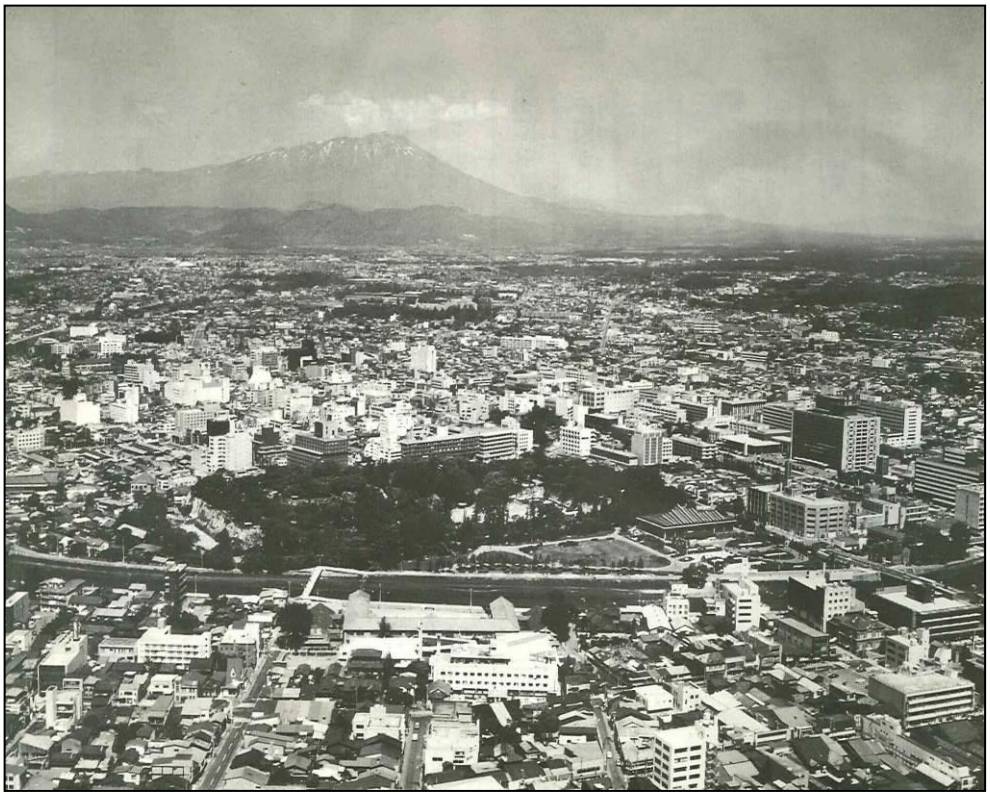


盛岡城釘かくし

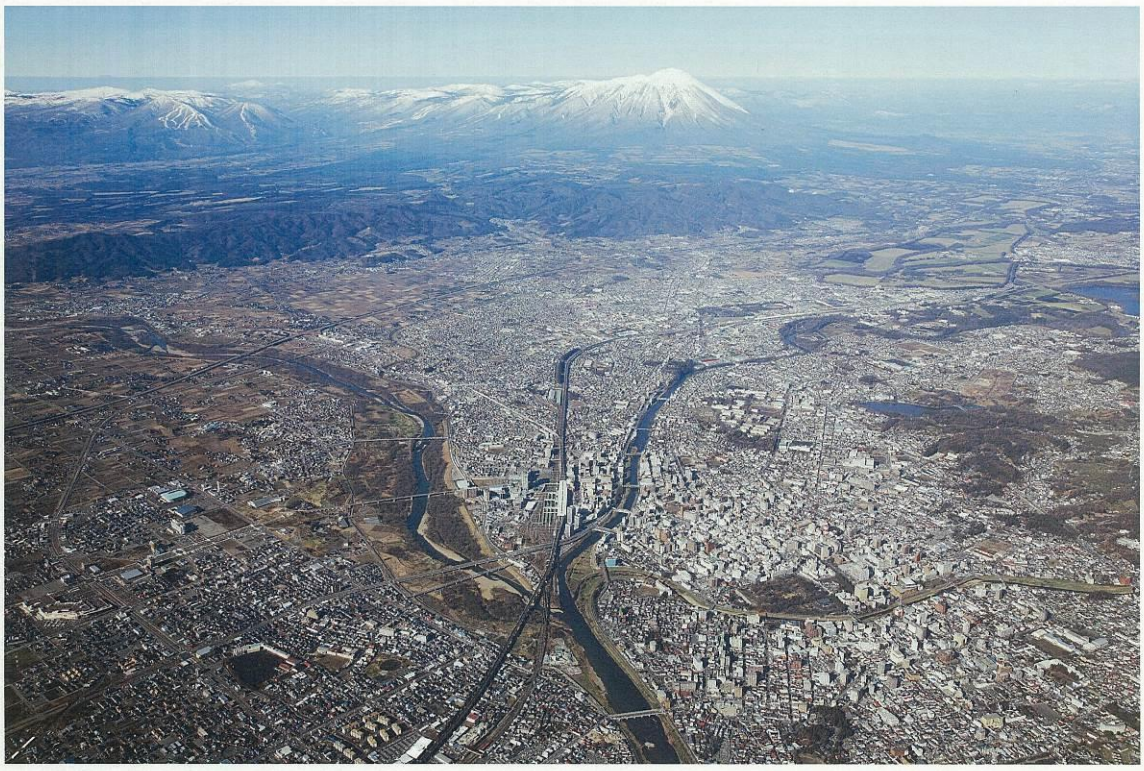


▲城下町のころ

（昭和 54(1979)年発行の由来記に掲載）



（昭和 54(1979)年）



（平成 19(2007)年　写真提供：国土交通省）

▲盛岡市街全景

城下盛岡町名由来記・目次

（・各写真の「昭和五十四（一九七九）年」は、「当時の由来記に掲載」の意です。
・各略図は、概ねの範囲を示すもので、厳密な境界を示すものではありません。）

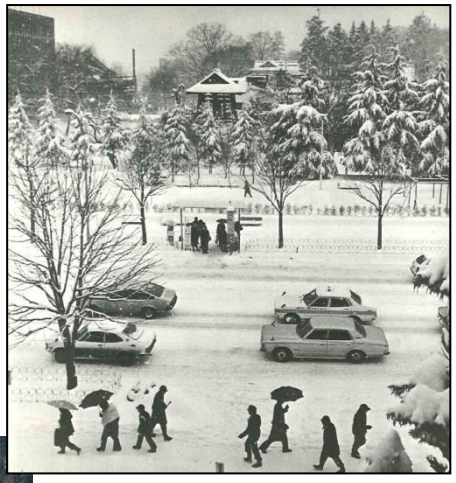
旧町名	町名由来板設置場所	ページ
内丸	内丸十一番地内（県公会堂前）	1
日影門外小路	中央通一丁目六番地内（日影門緑地内）	2
仁王小路	大通三丁目八番地内（桜城小学校正門横）	3
紺屋町、鍛冶町、紙町	紺屋町四番二十号（菊の司酒蔵前）	4
本町かいわい	本町通一丁目九番三十号（盛岡信用金庫本町支店駐車場内）	5
上小路	茶畑二丁目八番二十五号	6
三戸町	本町通三丁目十五番地内（岩手医大アパート前）	7
上田三小路	上田一丁目二十番四十四号（岩大農学部通用門前通）	8
上田組町	上田二丁目六番六号	9
馬場小路かいわい	馬場町六番地内（駐車場内）	10
馬町	清水町一番九号（馬町会館前）	11
穀町、新穀町	南大通二丁目七番地内（東北銀行南大通支店前）	12
鉈屋町	鉈屋町五番二十七号	13
仙北町、青物町	仙北一丁目十三番地内（徳清、明治橋側の地）	14
平山小路、帷子小路、新山小路	中央通三丁目六番地内（中央児童公園内）	15
加賀野	加賀野一丁目三番地内（川留稲荷神社境内）	16
大沢川原小路	大沢川原三丁目五番地内（旧宣教師館前）	17
八日町、四ツ家町	本町通二丁目十一番地内（駐車場内）	18
呉服町、六日町	中ノ橋通一丁目一番地内（啄木・賢治青春館前）	19
山岸町、御弓町	山岸一丁目五番二号（岩手銀行山岸支店前）	20
材木町、茅町	材木町六番地内（盛岡信用金庫材木町支店前）	21
長町	長田町十番地内（長田町地区コミュニティ消防センター前）	22
下小路	愛宕町十四番地内（中央公民館前）	23
葺手町	中ノ橋通一丁目八番地内（浅沼醤油店前）	24
肴町、生姜町	肴町五番一号（みかわやみゆき館横）	25
八幡町、片原	八幡町十三番地内（八幡宮境内前）	26
餌差小路、十三日町	肴町十一番三十八号（※　一時撤去中）	27

内丸（うちまる）

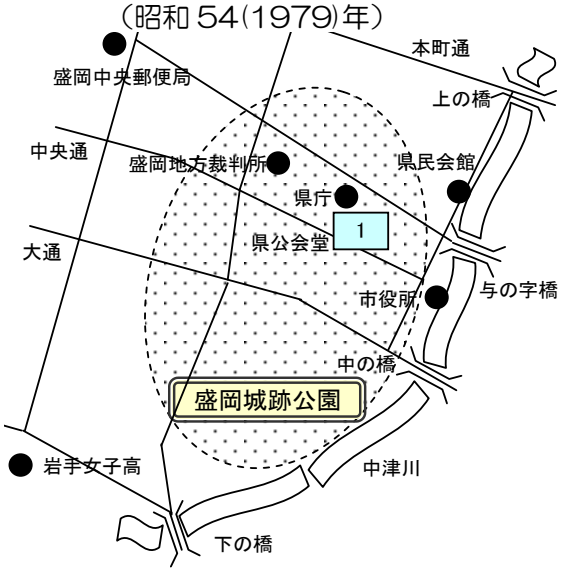
江戸時代、盛岡城の内堀と中堀の間に囲まれた区域を内丸と称したことに由来。藩主の一家・一門など高知（たかち）という重臣の武家屋敷が置かれた地域であった。寛永一三（一六三六）年、三代藩主南部重直は御新丸という別郭を造っている。中堀は堀と土塁が廻らされ、外の町と区切られていた。東に中ノ橋御門、北に大手先（おおてさき）御門、西に日影御門があり、番所の検問を受けなければ入れなかった。明治三（一八七〇）年に門が撤去、堀も埋められて出入が自由となった。武家屋敷も払い下げられて取り壊された。

明治維新後は、盛岡県の県庁（明治五年以後は岩手県庁）が置かれ、官庁街として発展する。明治一三（一八八〇）年には岩手中学校が設立され、同三二（一八九九）年に岩手県盛岡中学校（現県立盛岡第一高校の前身）と改称し、石川啄木や宮沢賢治などを輩出。明治二二（一八八九）年に盛岡市制が施行され、盛岡市役所が置かれた。

なお、国指定天然記念物・石割桜のある盛岡地方裁判所の場所は、江戸時代に北家の武家屋敷だったところである。



（昭和 54(1979)年）　「県公会堂」付近



日影門外小路

ひかげもんそとこうじ

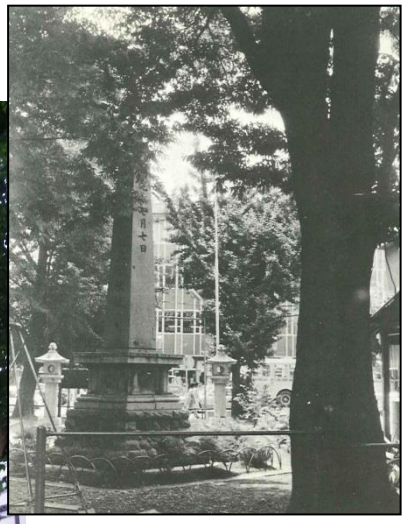
内丸の西門にあたる日影御門は、現在の北日本銀行本店の前付近にあった。この日影御門の外、四ツ家町に至る一画を日影門外小路と称し、中下級の武士が住んでいた。盛岡城下の草創期には、三戸から移って来た人々が住み三戸町と呼ばれていた時代もあった。

日影門外小路の入口右角には、御稽古場（藩校）があり、明義堂（めいぎどう）を経て、慶応二（一八六六）年に作人館（さくじんかん）と改称され、文・武・医を教授、幕末から明治にかけて多くの人材を生む温床となった。作人館跡は明治五（一八七二）年の学制公布により仁王小学校となり、同九（一八七六）年の明治天皇巡幸のとき行幸があった。現在その一部が明治天皇の聖跡記念公園（日影門緑地）となっている。

日影御門を出て西に向うと仁王惣門があり、この辺りで赤川堰を堀とする土塁が廻らされた外堀の西門に当たっていた。

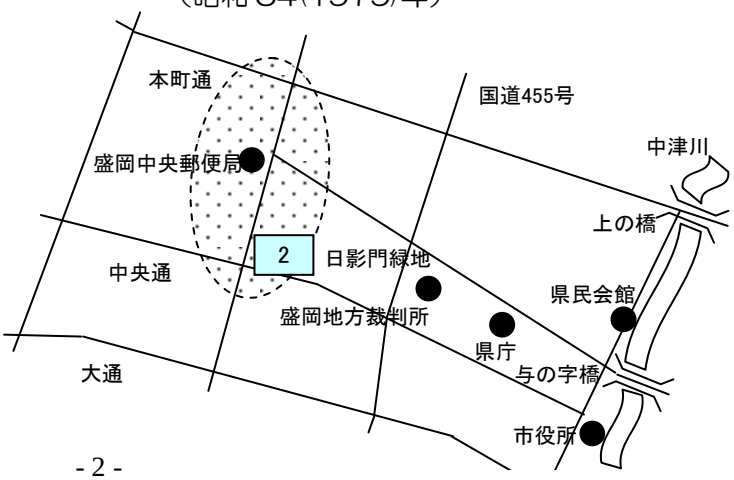
外堀の土手の上には、鐘楼が立ち、「三戸町の時鐘」と呼ばれていた。現在は桜山神社前の鶴ケ池の側に移転し、市の文化財に指定されている。

「日影門緑地」



（昭和 54(1979)年）

（平成 21(2009)年）



仁王小路（におうこうじ）

ここには平安時代の仏像群を残す古寺があったが、江戸の寛文期（一六六〇年代）に廃され、仏像は明治に東楽寺（とうらくじ）（現盛岡市玉山区城内）に移し、侍町となった。仁王の地名は、その古寺に仁王堂があったことに由来するという。

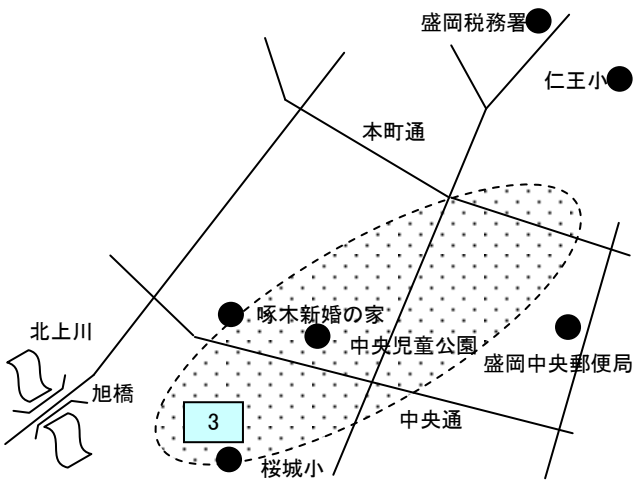
侍諸士の二、三男の独立で人数が増え、仁王小路周辺に仁王新小路、帷子（かたびら）小路、新山（しんざん）小路が新たに造られた。

これら侍町には、江戸前期頃まで三十か所ほどの辻番所が置かれ、とりわけ他国者は原則として通行が許されなかった。また、三戸町と仁王小路の間には仕切門があって、町人は許可なく通ることができなかった。

盛岡城の直下を流れていた北上川は、延宝元（一六七三）年から切り替え工事が行われ、新土手（新築地（しんちくち））が築かれて、旧河床は古川と呼ばれた。この工事によって生まれた大沢川原に新たに大沢川原表小路・裏小路の侍町が造られると、仁王小路などとの連絡路として、古川を渡る二本の縄手道（なわてみち）が設けられた。

（昭和 54(1979)年）

（平成 21(2009)年）　中央通二丁目６番地付近



紺屋町（こんやちょう）・鍛冶町（かじちょう）・紙町（かみちょう）

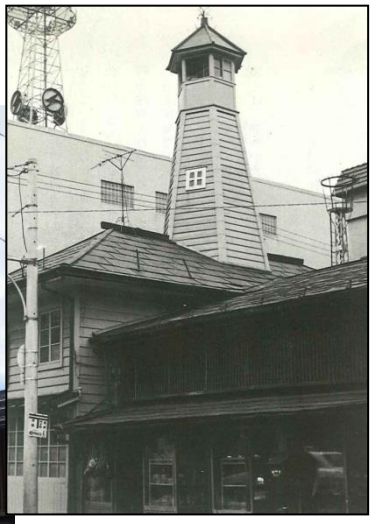
この三つの町は、江戸時代、盛岡城下を通る奥州街道に沿って発展した町人町であった。

紺屋町は、中津川を利用した紺屋（染物屋）が集まっていたことに由来。南部紫（むらさき）や南部茜（あかね）によって染められた布地は、盛岡藩の特産物であった。

鍛冶町は、鍛冶職の棟梁職人が居住していたことに由来。刀鍛冶や鉄砲鍛冶のほかに農具を作る野鍛冶も住んでいた。当町の裏通りを鍛冶町裏ともいった。

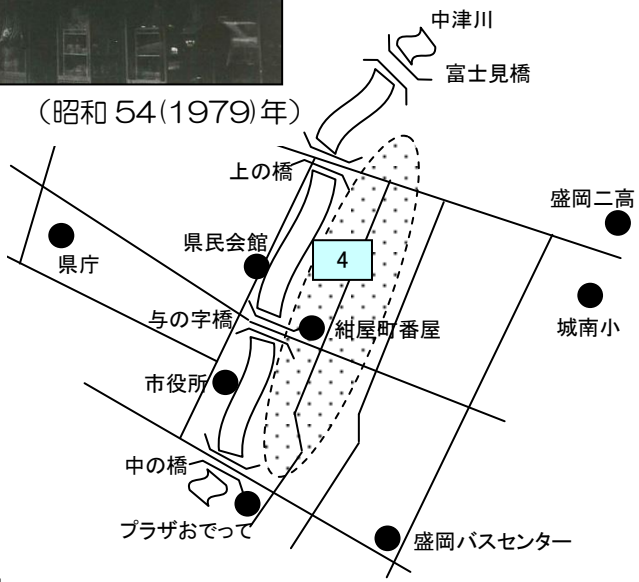
鍛冶町には、江戸日本橋を起点にした奥州街道の第一三九番目の一里塚が置かれ、駅所（えきしょ）として賑わったところである。町中にあったため塚は築かれなかった。

紙町は、上の橋の両詰に上方の紙商人を住まわせたことに由来。盛岡で初めて紙が漉かれたのは、寛文九（一六六九）年。筆墨も商ったため、紙町の東詰に天満宮が祀られていた。



（昭和 54(1979)年）

（平成 21(2009)年）　「紺屋町番屋」付近



本町（ほんちょう）かいわい

古くは京都出身の商人や京風構えの町家が多かったともいわれ、京町と呼ばれていたが、文化九（一八一二）年に本丁となり、明治以後、本町となった。盛岡城の大手先（おおてさき）御門に近い最重要地に置かれた城下の本（もと）となる町の意味が由来。

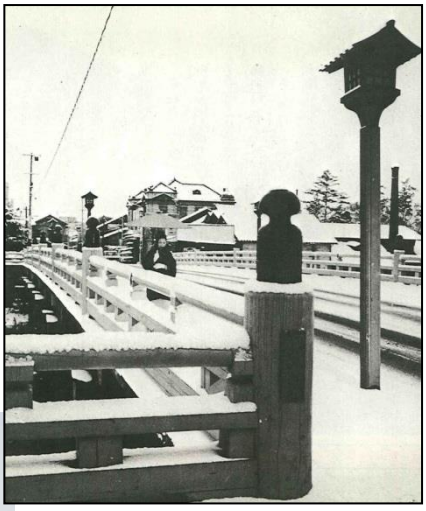
本町かいわいは、内丸や城中の御用を扱う商人や職人が多かった。また奥州街道が通り、沿岸方面へ通じる野田街道の起点にもなっていたため、大商家も多かった。

八日町は、本町の西に続く商人町で、毎月八日に市が開かれたことが由来。

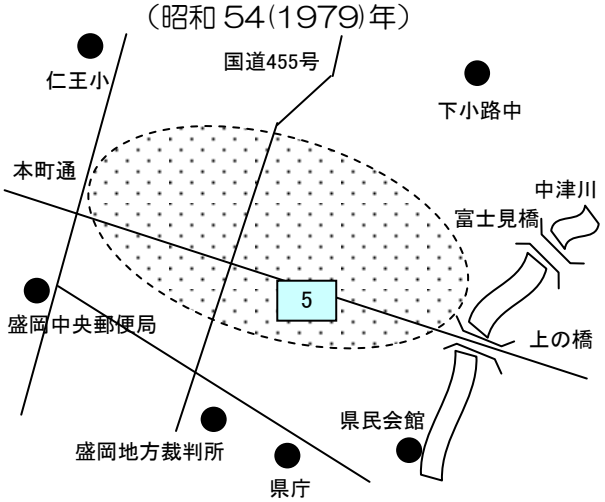
本町の東側には大工町があり、大工・左官・石工・庭師などの職人町であった。上大工町と下大工町の二町に分かれていた。城下最初の質屋もあった。

油町は、油商人が住んでいたことに由来。野田街道の城下入口に当たり、塩や海産物を扱う商人や牛馬宿も多かった。

花屋町は初め寺町と呼ばれていたが、明治以降、花屋町と呼ぶようになった。北山の寺院群に通じる道筋で、法要や墓参に供える花を売る店があったことが由来。



（昭和 54(1979)年）



（平成 21(2009)年 ）　「上の橋」付近

上小路（うわこうじ）

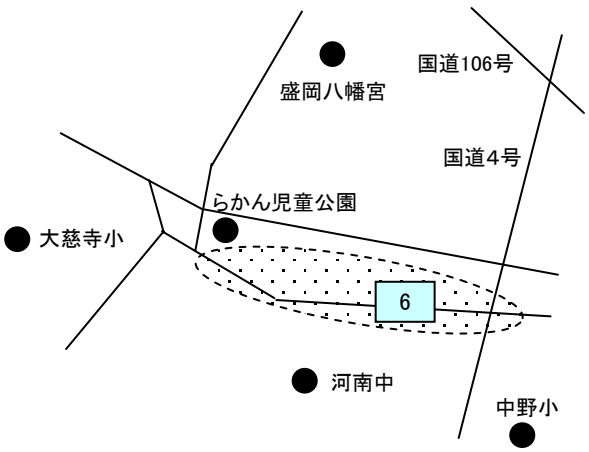
高崩（たかくずれ）の段丘に造られた侍町の小路があったことに由来。江戸中期まで中野村（東中野村）の枝村であったが、後に足軽町として盛岡城下の武家屋敷地となった。

当地は宮古へ向かう閉伊街道の城下口に当たり、足軽町の上小路組町（十人組町）と、町家を形成した上小路町に分かれていた。同町東はずれには、簗川春木場と呼ばれる貯木場があった。

上小路東方の新山館（しんざんだて）には、幕末の文久三（一八六三）年に洋学校「日新堂」が建てられた。近代製鉄業の先駆者大島高任（たかとう）と西洋医学者八角高遠（やすみたかとう）が指導者となって、採鉱・製錬・砲術・医学などの教育・研究・開発の事業を行い、盛岡藩における洋学発祥の地となった。南大橋近くの岩手自動車学校入り口に、昭和四五（一九七〇）年に岩手県医師会によって建てられた記念碑がある。

（昭和 54(1979)年）

（平成 21(2009)年）　茶畑二丁目 15 番地付近



さんのへちょう

三戸町

近世初頭の慶長期（一六〇〇年前後）に南部氏が城下を三戸から盛岡へ移すにあたり、盛岡城造営や城下町建設の工事に従事したのは三戸から来た武士や町人であった。この三戸出身の人々が集住したことが、町名の由来。

その範囲は、当初、内丸の日影御門の外に位置する広い地域を指したようであるが、盛岡城下が整備されるに伴い、侍町と町人町が区分されると、赤川を堀とする外堀の外側の町人町を指すようになった。田町（たまち）と呼ばれた時もあった。

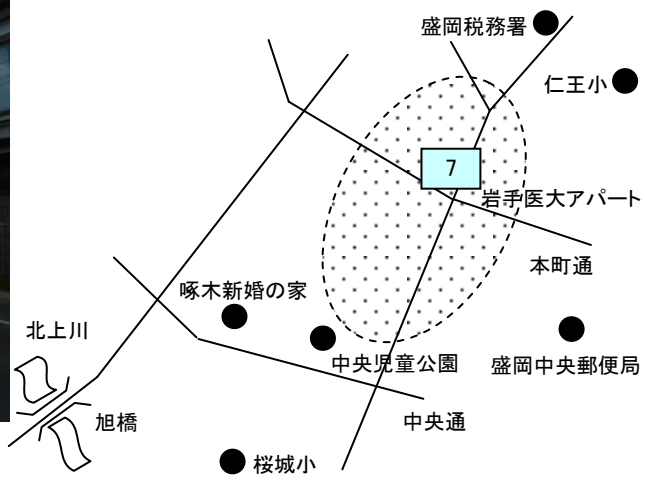
このように三戸町は盛岡城下最初の町人町で、城下最初の市日が立てられたのも、この町であった。市は、月に六度の六斎市（ろくさいいち）、年一度の歳市の馬市も、当初この町で開かれていた。また、城下の雫石街道・鹿角街道の往還路にあたり、材木町とともに商業地として繁昌したところであった。

この町に隣接する外堀の土手の上に鐘楼が立てられ、「三戸町の時鐘」と呼ばれた。鐘は、現在、内丸の鶴ケ池の側へ移され、市指定文化財になっている。

（昭和 54(1979)年）

「岩手医大アパート」付近

（平成 21(2009) 年）



上田三小路（うえださんこうじ）

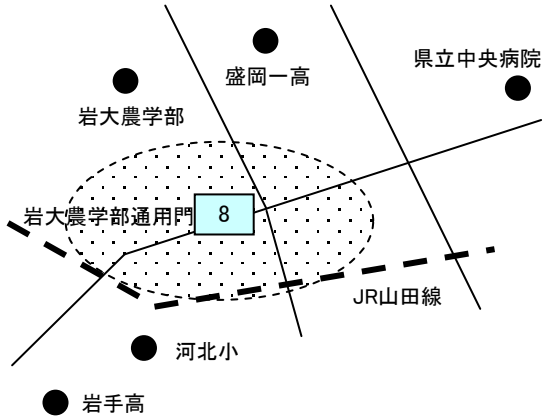
上田三小路は、江戸時代、中下級の武家屋敷が集まっていた上田小路、与力小路、上田新小路の三つの町を総称したもの。

上田小路は、梨木町から上田への登り口に尼寺高源寺（こうげんじ）があったことから、当初は上田門前町と呼ばれていた。高源寺には、近世初頭に藩重臣の北秀愛（ひでちか）亡き後の奥方が尼となって入山、高源寺殿と呼ばれた。また、この寺の前の坂を高源寺坂とか、訛って「こうらひ」坂とも呼ぶようになった。

与力小路は、元和元（一六一五）年の屋敷割で足軽町になり、上田新小路は、嘉永五（一八五二）年に、城下の諸士屋敷が不足していた時にできた侍町である。この地は、明治三五（一九〇二）年、盛岡高等農林学校（現岩手大学農学部）が創立された際、学校構内に編入された。ここで宮沢賢治も勉学に励み、植物園の樹木は、武家屋敷の庭園のたたずまいを伝え、石川啄木の妻節子生誕の地も構内にある。

（昭和 54(1979)年）　「岩大農学部通用門」付近

（平成 21(2009)年）



上田組町（うえだくみちょう）

足軽同心組の武家屋敷地であったことに由来。上田同心町とも呼び、上田町とも称した。

盛岡藩では城下の北の関門として、奥州街道口に土手を廻らし柵を設けた枡形（ますがた）を造り、上田惣門とした。この枡形に至る道の両側に足軽組が配置されていた。各組三十人ずつの足軽組が五つあった。茅葺き屋根の屋敷が並び、家屋はほとんど同じ形の小郎党（ころとや）家で、屋敷の境はひば垣であった。この足軽が内職として作った草履表は、江戸で南部表（なんぶおもて）と称され、藩の特産物であった。各戸にグミの木が植えられたことから、上田ぐみ町と俗称されることもあった。

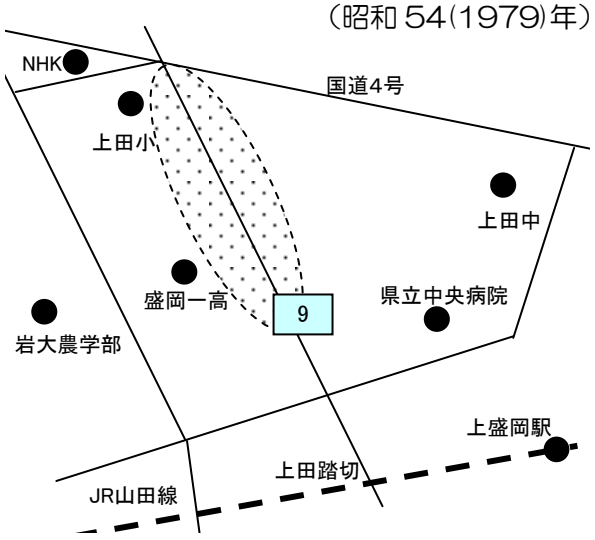
枡形の外側には数軒の茶屋があり、「上田茶屋」と呼ばれた。

上田堤は、盛岡城下の建設に際し河北地域の治水上最も重要な施設であった。四つの堤があったが、現在は中堤・下堤が「高松の池」と呼ばれ、景勝地となっている。

この地域は近代に入ると、盛岡高等農林学校、盛岡中学校、県立工業学校、盛岡高等工業学校などが次々と建設され、文教地区として発展して行った。

（昭和 54(1979)年）　「上田踏切」付近

（平成 21(2009)年）



馬場小路（ばばこうじ）かいわい

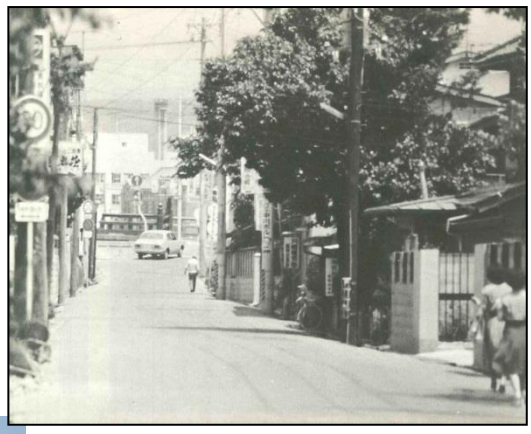
古くは馬場町と呼ばれ、文化一〇（一八一三）年に馬場小路と改められた。江戸時代、現在の下橋中学校の場所に藩の「桜之馬場（桜馬場）」があったことに由来。周辺には、馬役人の屋敷や厩などが並んでいた。元禄の頃までは幕府や諸藩の馬買い役人が盛岡まで来て、馬を検分して買って行った。また、桜花の時季は、花見客が群集する行楽地になった。

中津川が北上川に合流する左岸地区には、馬場小路のほかに川原小路、鷹匠小路、上衆小路、大清水小路の五つの小路があり、中下級の武家屋敷地であった。

川原小路は、中の橋下流の川沿い下の橋辺りまで指し、鷹匠小路は、藩御抱えの鷹匠の屋敷のあったところである。

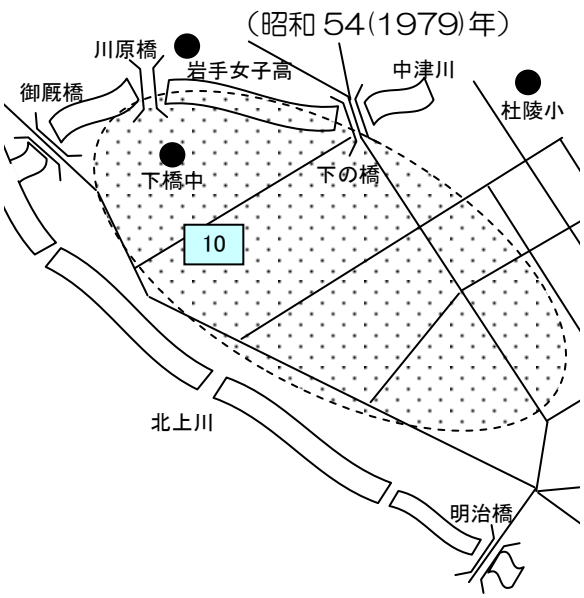
上衆小路は、三代藩主南部重直の時代に上方から新規に召抱えた侍などを住まわせたところであった。

大清水小路は、良水が数カ所から湧出していたところに由来する。



（平成 21(2009)年）　馬場町５番地付近

（昭和 54(1979)年）



うまちょう

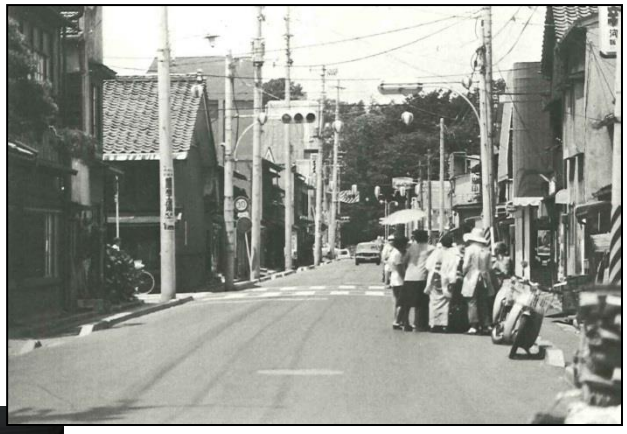
馬町

寛永盛岡図に新馬苦労（しんうまくろう）丁とあり、万治元（一六五八）年に新馬町と改めた。後に馬町と改め、さらに文化九（一八一二）年に馬喰（ばくろう）町と改められたとする説と、そのまま馬町とされたとする説がある。

馬の売買が行われていたことが由来。当町では万治元年に馬のせり市が行われており、宝永七（一七一〇）年、藩命により駄馬の売買は当町のみで行われることとした。当初、馬市は、歳市として毎年一二月の九日、一九日、二九日の三回開かれていた。

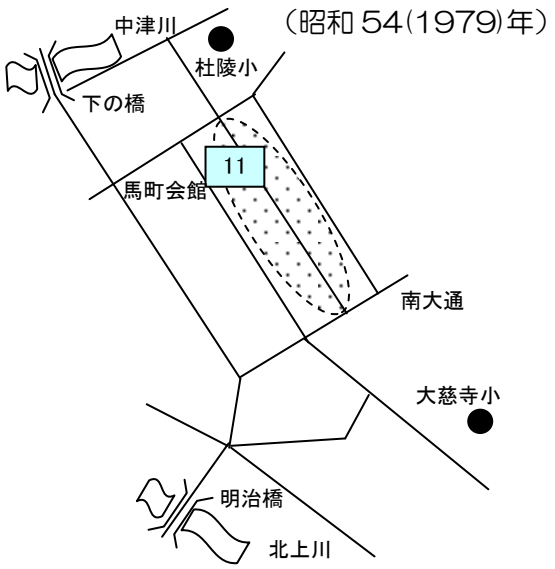
明治三（一八七〇）年、民部省養馬懸出張所が設置されたが、産馬事業の民有移管により、同一四（一八八一）年、岩手県産馬事務所が創立された。同事務所が明治二三（一八九〇）年に改組して、盛岡産馬畜産組合が誕生する。馬町馬検場を中心とする馬市は、同四五（一九一二）年まで行われ、その後、馬検場は新馬町（現松尾町）に移った。

文化九（一八一二）年の町方再編成のときに、馬町と十三日町が丁とならなかったのは呼びにくいためといわれる。



（昭和 54(1979)年）

（平成 21(2009)年）　肴町 10 番地付近



穀町（こくちょう）・新穀町（しんこくちょう）

穀町と新穀町は、城下南に位置する惣門から入った奥州街道沿いの町人町を指す。古くは石町（こくちょう）と書き、文化九（一八一二）年に穀町と改められたうえ、二つの町に分かれた。

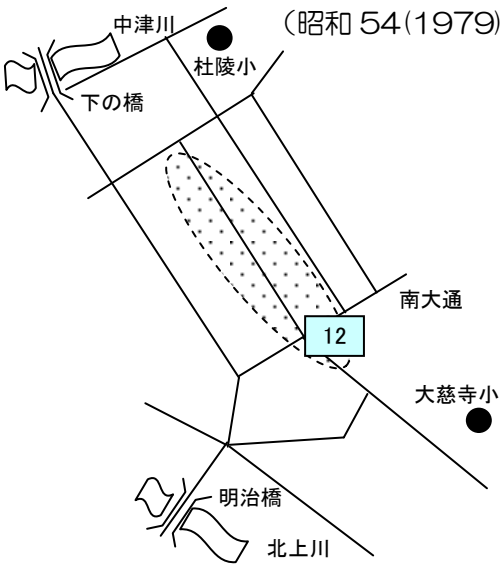
藩の御蔵米払下げの取引所で、穀物商が多く居住したことが由来。

穀町は、古くは三日町といわれた。年の暮一二月の九、一九、二九日の三回、新山河岸の御蔵米の払下げが行われたことによる。穀町惣門の桝形（ますがた）には御番所が置かれ、城下へ出入りする人と物を取り調べた。城下南の玄関口として交通量が最も多く、取締りは厳重を極めた。惣門は、朝六時に開け、夕六時に閉じられた。

こうした立地事情からこの町には旅館が多く、諸国の商人、旅人を始め、江戸後期には蝦夷地（えぞち）警備に向かう東北諸藩の武士なども宿泊した。

穀町から大清水小路へ抜ける道は、会所場（かいしょば）横町と呼ばれ、刑事裁判を執行する会所場が置かれたところである。また、牢屋も付設され、罪人の処刑も行われた。

（昭和 54(1979)年）



（平成 21(2009)年）　清水町２番地付近

鉈屋町（なたやちょう）

京都の富豪鉈屋長清が当地に来て、鉈屋山菩提院（しゃおくさん）という寺を建立したことに由来する。菩提院は後に内加賀野に移されたため、昔はこの寺院の前も鉈屋町と称し、二つの鉈屋町が存在したこともあったが、文化九（一八一二）年に改められて、当地を鉈屋町として城下の一町とした。

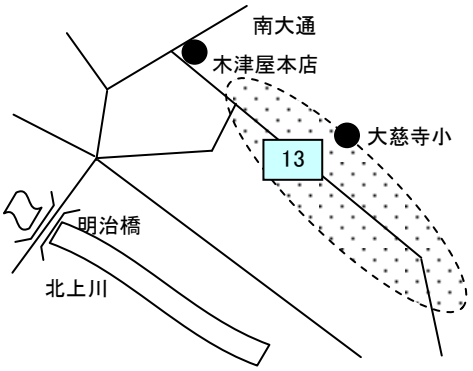
当町の西側に水主（かこ）町があり、文化年間に用水桶を町内に設ける藩命があった時には、水主町のほか当町から上小路（うわこうじ）の曲り角で中野村枝村十文字をも含めて鉈屋町といった。

水主町は、北上川の舟運に従事する船頭などの住む町で、新山舟橋を管理する役目も持っていた。また、藩主の飼っていた鶴の餌にする川魚を捕る仕事などもしており、小禄であるが、藩から扶持を得ていた。

また、当地は江戸時代から良質の湧水が豊富な地域で、酒・味噌・醤油などの醸造業が盛んだった。それを今日伝える大慈清水、青龍水は盛岡三清水に数えられ、平成の名水百選に選ばれている。

（昭和 54(1979)年）

（平成 21(2009)年）　鉈屋町 10 番地付近



仙北町・青物町

（せんぼくちょう　あおものちょう）

仙北町は、江戸初期に、二代藩主南部利直が奥州街道の南口に出羽国仙北郡の出身者を住まわせたことに由来するという。

当町は紫波郡の穀倉地帯に近く、米の集散や農民相手の商工業によって発展した。

延宝八（一六八〇）年に新山舟橋が架せられると、洪水で舟橋をはずす時は、当町側の水主（かこ）が橋の中程から南を担当し、北側は鉈屋町側の水主が担当した。

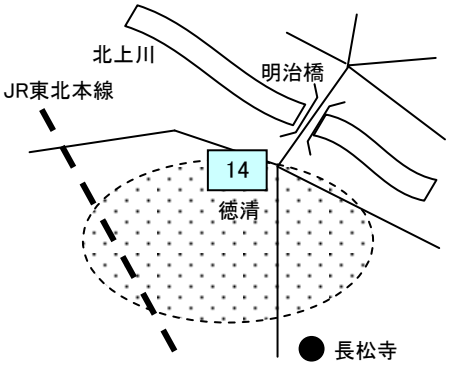
舟橋の橋詰から下る辺りを千日川原と称し、元禄飢饉の死者を供養する千日堂不退院（虚空蔵（こくぞう）さん）の建立に由来。

青物町は、古くは仙北町新小路といい、文化九（一八一二）年に青物町と改められた。城下で消費する野菜・種物・粉なんばんなどの産地で、これらを扱う商店が集まっていたことに由来する。

青物町の北西にある七軒町（しちけんちょう）は、駒形神社の門前町で、当初の家数が七軒あったことに由来。頭人は御駒太夫と称し、太神楽などの神事芸能を伝承した。

（昭和 54(1979)年）

（平成 21(2009)年）　「徳清」付近



平山小路・帷子小路・新山小路

（ひらやまこうじ　かたびらこうじ　しんざんこうじ）

江戸初期には北上川の遊水池である大沼に面した湿潤の土地であったが、上田堤と北上川切り替えの工事によって水源が絶たれ、耕地に変った。

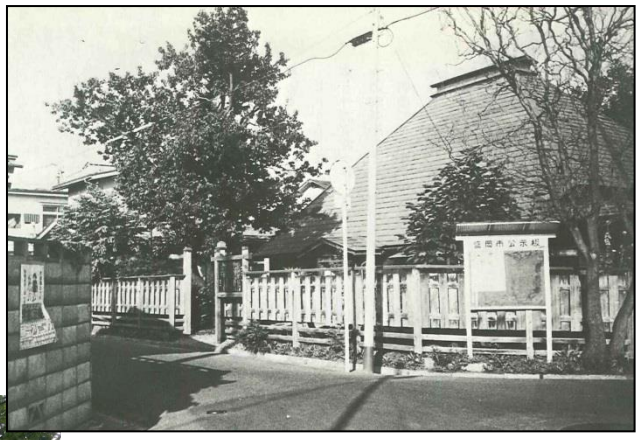
新山小路は、寛永三（一六二六）年に二代藩主南部利直が建立した新山堂と称する岩鷲山（がんじゅさん）大権現の遥拝所があったことに由来する。岩手山麓にある本山の岩手山神社に対して、新しく神霊を勧請して祀った神社という意味で新山堂といった。

平山小路は元禄年間に平山伝右衛門が町割をしたことから、その名が付けられた。

また、帷子小路も貞享年中に帷子多左衛門が町割をしたことに由来する。

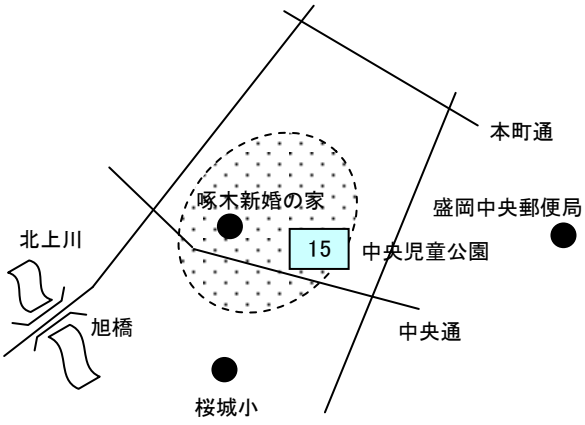
この三小路に住んだ侍は、ほとんど五十石内外の中下級の武士であった。

明治三八（一九〇五）年六月四日から二四日までの二〇日間、石川啄木が妻節子と居住した啄木新婚の家も、こうした武家屋敷の一つであり、現在も見ることができる。



（昭和 54(1979)年）

（平成 21(2009)年）　「啄木新婚の家」付近



かがの 加賀野

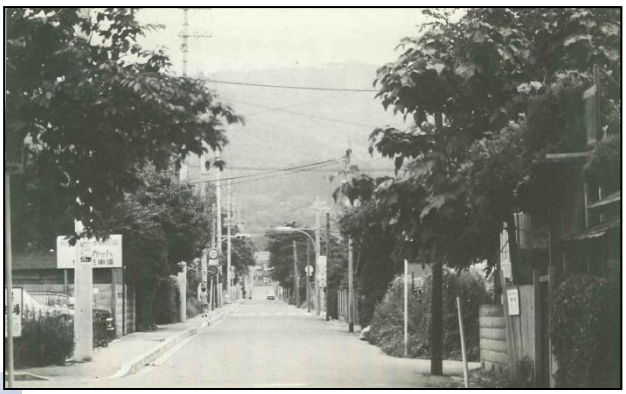
加賀という有徳の百姓が住んでいたことが由来といわれるが、柳田国男「地名の研究」の芝原・草原を意味する「カガ」が由来と考えられる。中津川から引水した桜川を堰となし、水田地帯になった。

天保四（一八三三）年以前から内加賀野小路と外加賀野小路に分かれ、その境は外堀であった。境には内加賀野御門（加賀野惣門）が置かれていた。江戸時代は侍町で、おもに御徒（おかち）と呼ばれる下級武士が住んでいた。

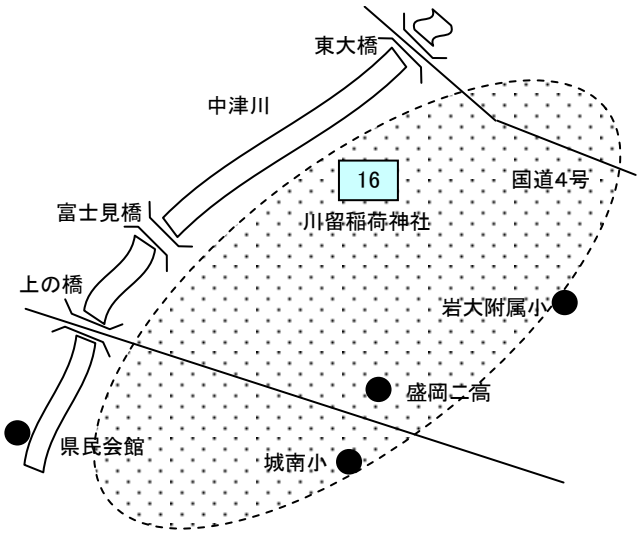
中津川沿いには加賀野裏小路が造成され、明治以降は磧（かわら）町となり、石川啄木の「小天地（しょうてんち）」が発行されたのは、ここの武家屋敷の一つであった。

明治二二（一八八九）年の市制施行の際には、加賀野新小路の一部、内加賀野小路は大字志家に含まれ、外加賀野一体は、大字加賀野とされた。

大正一三（一九二四）年、加賀野耕地整理組合が設立され、約一〇万坪の住宅街を造成した。



（昭和 54(1979)年）



（平成 21(2009)年）　加賀野一丁目 11 番地付近

おおさわかわらこうじ

大沢川原小路

大沢川原の地名は古くからあり、藩主がしばしば鷹狩りをした時代もあった。

江戸前期までは北上川の本流が現在の開運橋通・大通・産業会館前を流れ、洪水の被害に度々見舞われた。

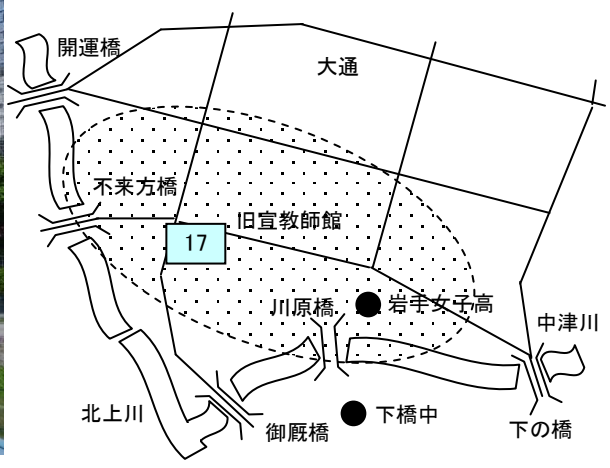
延宝元（一六七三）年に北上川を切り替える大工事に着手、材木町裏から中津川河口を経て、新山舟橋の辺りまで、約二一町（約二三〇〇メートル）の間に高さ五間（約九メートル）の土手を築いた。中津川の河口以北を新土手と呼び、文化年間に新築地（しんちくち）と改めた。この新土手ができてから二〇年経っても、荒涼たる川原であったことから、大沢川原の名が一般的になった。なお、中津川の河口以南の土手は杉土手といった。

元禄九（一六九六）年、新屋敷を希望する諸士にこの地を与え、町割をして生まれたのが、表大沢川原小路と裏大沢川原小路である。両町は明治初年に合併して大沢川原小路となった。

旧北上川の西北河岸に盛岡城で使う菜園があり、御菜園前や御菜園御門前川原という地名もあった。

（昭和 54(1979)年）　「下の橋」付近

（平成 21(2009)年）



八日町・四ツ家町

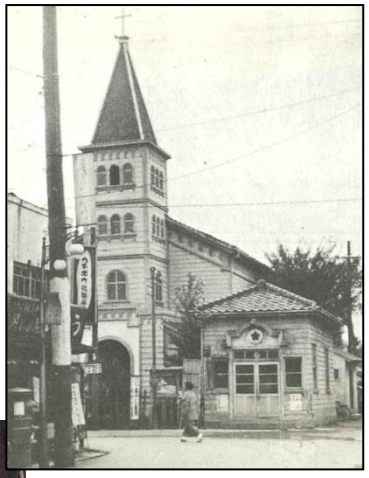
ようかちょう　よつやちょう

八日町は、文化九（一八一二）年に本町と改名された京町の西隣りで、本町は毎月二八日、この町は八日が市日であったことに由来する。

八日町の北に四ツ家町があり、上田への出口、赤川橋の手前に、外堀にかかる四ツ家御門があり、盛岡城下を通る奥州街道の北の玄関口に当たっていた。またこの付近には、北に入る袋丁があり、谷小路という侍町があった。

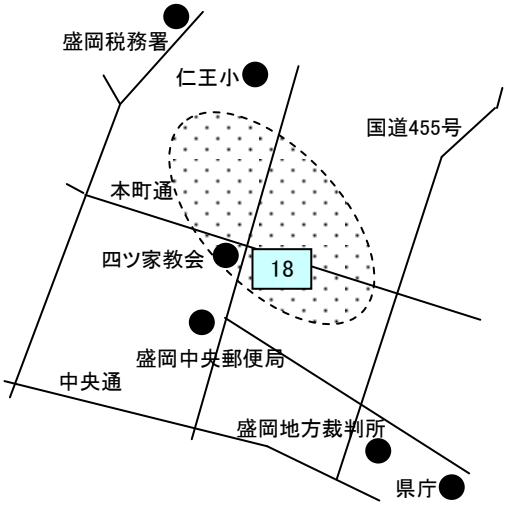
四ツ家町の由来は、町割に際し四軒の家を初めに建てたことによるという。また、四ツ家御門に至る通りを大四ツ家ともいった。

「田中の地蔵さん」の名で親しまれている四ツ家の地蔵尊は、五代藩主南部行信の母堂の遺骸を荼毘（だび）に付した火屋（ほや）の跡に建てられたもので、以前は東禅寺門前の田圃の中にあったことに由来する。現在地に遷座されたのは、大正元（一九一二）年である。



（昭和 54(1979)年）　「四ツ家教会」付近

（平成 21(2009)年）



呉服町・六日町

ごふくちょう　むいかちょう

呉服町は初め新町や中町と呼ばれていたが、文化九（一八一二）年に改称された。現岩手銀行中ノ橋支店前には、藩の高札場「札の辻」があった。

呉服町には慶応四（一八六八）年の「南部家御用金被仰付人員」番付によれば、西方大関、小野組最大の支店であった井筒屋善八郎を筆頭に渋谷善兵衛（味噌醤油・呉服）、近江屋治郎兵衛（呉服）、井筒屋徳十郎（酒屋）、近江屋市左衛門（酒屋）、近江屋善六（質屋）、近江屋覚兵衛（呉服）等の豪商が軒を並べ、城下の上方商業の中心地を形成していた。

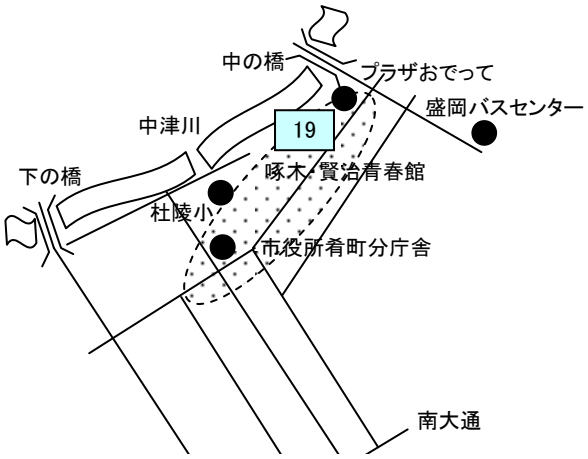
近代に入り、明治・大正・昭和に呉服町かいわいに銀行が集中し、銀行街の様相を呈したのも、江戸時代の歴史に負うところが大きい。

六日町は、呉服町と上衆小路の間で、毎月六・十六日が市日であったことに由来。ここには木津屋権治（醤油）、油屋孫六（油屋）等の店があった。

六日町には公儀役人や他藩の藩主・重役などを宿泊させる御仮屋が設けられ、「藩の迎賓館」のような役割を担っていた。

（昭和 54(1979)年）

（平成 21(2009)年）　「市役所肴町分庁舎」付近



山岸町・御弓町

やまぎしちょう　おゆみちょう

山岸町は野田街道沿いにできた町で、文化九（一八一二）年に山岸丁となった。山岸町の先には、寛文九（一六六九）年に御弓組が新規に召抱えられ、足軽同心町の御弓町ができた。枡形（ますがた）があり、盛岡城下北東口の警備の関門であった。

山岸真綿の産地で養蚕業の盛んだったことは、同町の阿弥陀堂跡地に遺されてある文政五（一八二二）年建立の蚕供養塔が物語る。

山岸町は、遠く閉伊地方から海産物、塩、鉄を牛馬で運んで来る「塩の道」「鉄の道」と呼ばれた野田街道筋の町として栄えた。

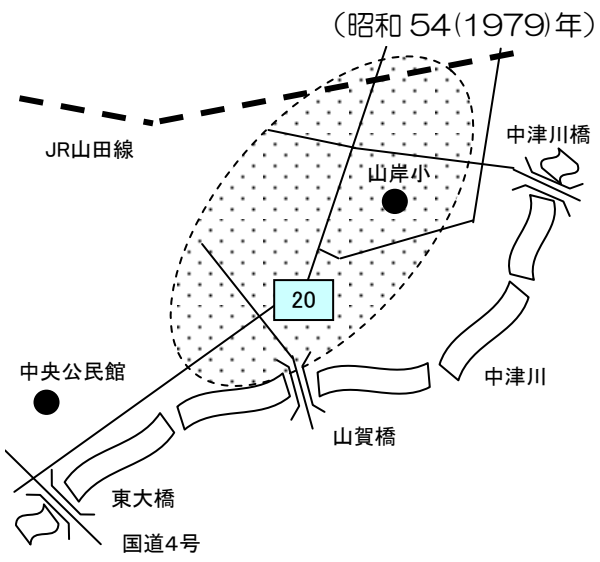
宝珠盛岡山永福寺は、盛岡城から東北の鬼門に当たる南部家の祈願寺で、盛岡五箇寺の一つであった。

秋の八幡宮例大祭には山岸獅子踊が神輿行列の露払い役を担っている。

「山岸小学校」付近

（平成 21(2009)年）

（昭和 54(1979)年）



材木町・茅町

ざいもくちょう　かやちょう

材木町は、古くは岩手町といったが、承応四（一六五五）年に材木町と改められた。その後、柾町（こばまち）と呼んだ時代もあったが、文化年間になって材木町と定められた。

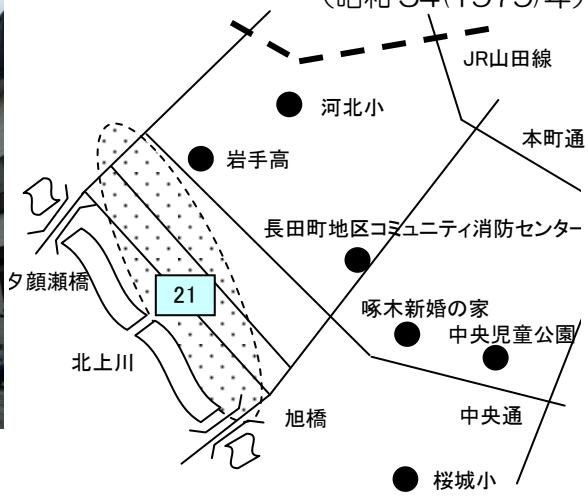
北上川の春木場が対岸の木伏（きつぶし）にあり、材木商が盛んだったことに由来。また、当地から岩手山がよく見えたため、あるいは岩手郡各村からの移住者が多かったため、岩手町と称したともいう。

材木町に続く北の町並みを古くは久慈町と呼んでいたが、文化九（一八一二）年に茅町と改められ、萱町とも書いた。久慈町と称したのは、久慈方面からの移住者が多かったためという。盛岡二十三町の最西端にあたり、茅町側の夕顔瀬橋のたもとには夕顔瀬惣門が置かれ、秋田・鹿角街道口の番所の役割を担っていた。

夕顔瀬橋は、洪水の度に流失したので、明和二（一七六五）年に北上川の中に大きな石で中島を築き、橋桁を高くして架橋したもので、関東以北にこれに匹敵する橋がないといわれた。

（平成 21(2009)年）　材木町３番地付近

（昭和 54(1979)年）



長町（ながまち）

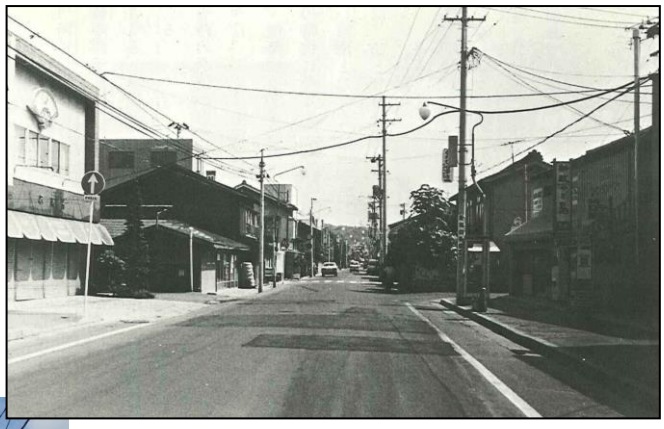
長町とは、城下の町々のうちで最も長い町並みから付けられたという。文化年間には長イ町と呼ばれたこともあった。

材木町から上田に通じる南北に走る道筋で、長町から上田に出る坂を駈上（かけあが）り坂と称した。

寛政一一（一七九九）年、長町の若者二五人が火消し組を藩庁に願い出て、許可された。これが盛岡の町方火消しの始まりである。馬町の一番組、油町の二番組と並んで三番組となった。

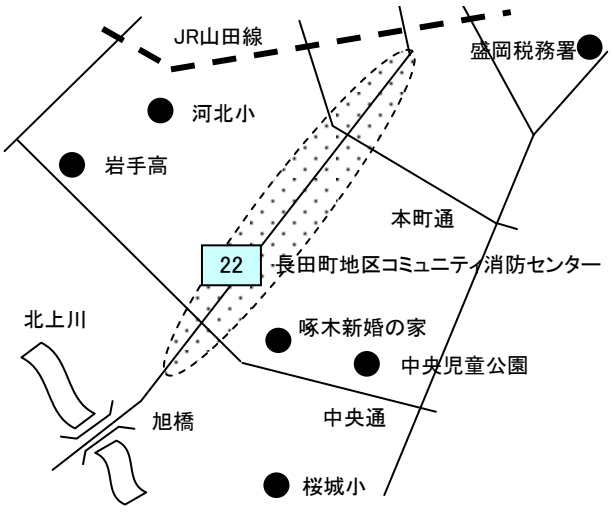
また、町の西、梨木町との間の田圃の中に聖寿寺末の明宜（みょうぎ）庵（あん）という庵寺があったが、戦後に廃寺となり、現在は聖光保育園の敷地になっている。

長町の東側の中程に、未決の犯罪人を入れる揚屋（あがりや）という牢屋があった。嘉永六（一八五三）年に四人の囚人が土台下を掘って脱獄する事件が起きている。元治元（一八六四）年には三閉伊百姓一揆の指導者三浦命助が牢死している。



（昭和 54(1979)年）

（平成 21(2009)年）　長田町 10 番地付近



下小路（したこうじ）

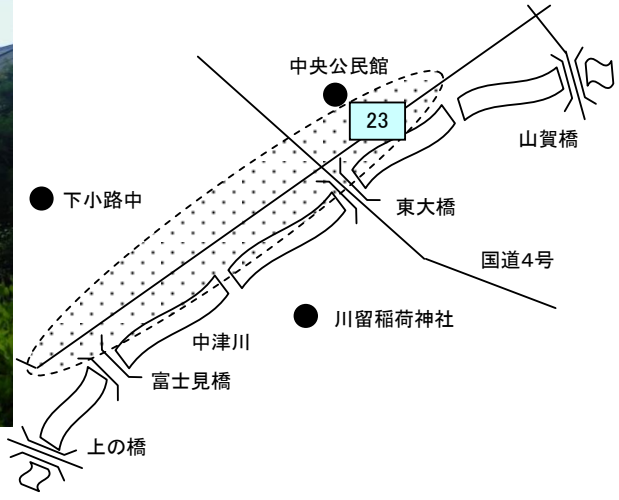
下小路の名は、愛宕山の下にある侍町の小路から付けられた。ここの武家屋敷は間口が狭く、下級武士の屋敷町だった。

愛宕山は盛岡城下を一望できる景勝地で、城の東北の鬼門に当たるため、三代藩主南部重直の時代に法輪院広福寺が建てられ、城下の鎮護とした。ほぼ全山に寺社があったが、明治維新の廃仏毀釈運動によって衰退し、現在は往時を偲ぶ遺跡などはなくなっている。黒田騒動で盛岡へ配流となり客死した栗山大膳と大吉父子の墓が、愛宕山中腹の法輪院跡に残っている。

下小路の西側の中程に位置する現盛岡市中央公民館の場所は、四代藩主南部重信の時代に城中の薬草を栽培する御薬園として造られことに始まる。その後、御殿、御茶屋、能舞台、庭園などが設けられ、下小路御屋敷と称し藩主遊歩の地とした。明治維新の混乱によって、建物や庭園は取り壊され、一時荒廃したが、明治四一（一九〇八）年に南部伯爵家別邸が新築された。戦後、別邸を譲り受けて、昭和三三（一九五八）年に盛岡市公民館が設置された。

（昭和 54(1979)年）

（平成 21(2009)年）　「中央公民館」



葺手町（ふくでちょう）

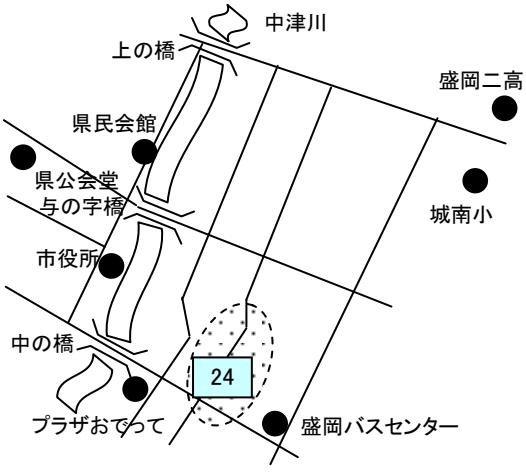
町名は、屋根葺職人が住む町であったことに由来。初め屋根葺町と呼ばれたが、明暦元（一六五五）年に葺手町と改められた。その後、葛右衛門町や吹手町とも呼ばれた。葛右衛門とは藩の屋根葺棟梁で、盛岡では茅葺き屋根を葛屋根と呼んだ。なお、藩が町家に初めて瓦葺を許可したのは、寛保元（一七四一）年であった。葺手町の東裏は外堀が通り、堀の向かいには藩庁の走り使いをする小人町があった。

葺手町と紺屋町との間に斗米山という大石があり、古くはこの辺りを斗米といった。紺屋町から当町へ出る横町を愛染横町と称した。町人や牛馬曳きは現岩手銀行中ノ橋支店前にあった高札場「札の辻」を敬遠してここを通ったという。

愛染横町は、地内に愛染明王像を有する宝林山愛染院に由来する名前で、明王像は後に愛染院が廃寺となってから斗米山長福院に移された。古謡に「斗米寅子に、馬場松子、石間亀子に騙されな」と詠われ、宮沢賢治作品『とっこべとら子』の舞台になっている。

（昭和 54(1979)年）

（平成 21(2009)年）　中ノ橋通一丁目４番地付近



肴町・生姜町

さかなちょう　しょうがちょう

肴町は、当初、鮮魚や乾物を扱う魚商人や荒物商人が住む町だったことに由来。肴町と荒町の二町立ての時代もあった。当町の東は外堀で、生姜町（煙草町）との間には土橋があり、肴町御門があった。奥州街道は呉服町を通っており、当町は本街道の側町に当たっていた。

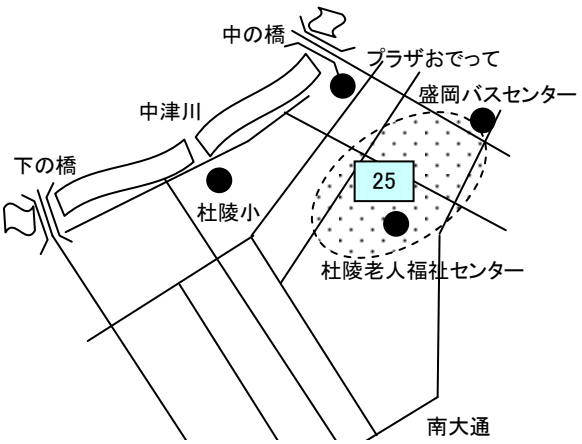
当町には万治二（一六五九）年から藩の御釜師初代小泉仁左衛門が居住したほか商家が多く、城下河南の扇のかなめ的位置にあって栄えた町である。

明治九（一八七六）年の天皇巡幸の際、餌差小路との間に御幸新道（みゆきしんどう）が造られ、行在所（あんざいしょ）となった菊池金吾邸は、明治天皇より二度稚松を賜り後に賜松園（ししょうえん）と呼ばれた。現在は、盛岡市杜陵老人福祉センターが建っている。

生姜町は、たばこ切り職人がいたため煙草町と呼ばれていたが、元禄八（一六九五）年に神明社が置かれ、宝暦二（一七五二）年以後は神明町となり、文化九（一八一二）年に生姜町と改められた。神明社の祭日九月一五日に付近で生姜を売る習俗があったことに由来する。

（昭和 54(1979)年）

（平成 21(2009)年）　肴町５番地付近



八幡町・片原

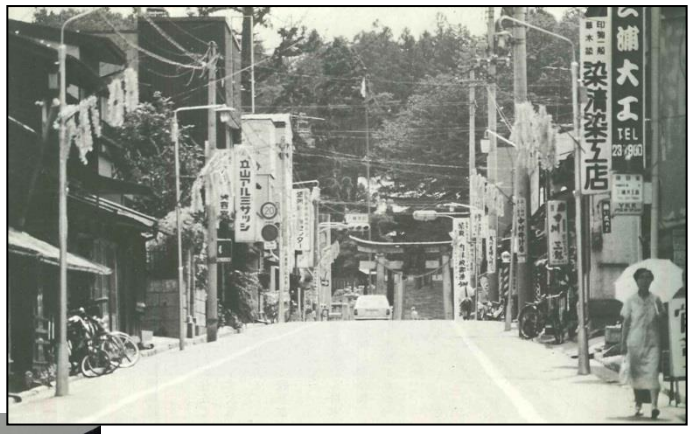
はちまんちょう　かたはら

八幡町の町名は、八幡宮の社殿造営に伴い、宝暦八（一七五八）年に社前の水田を埋め立て参道が造られ、鳥居町（門前町）として町割されたことに由来する。

片原は、八幡町に直交する片側だけの町並を片原町といったことに由来。同町は下厨川村の夕顔瀬片原と区別するため八幡片原町ともいった。

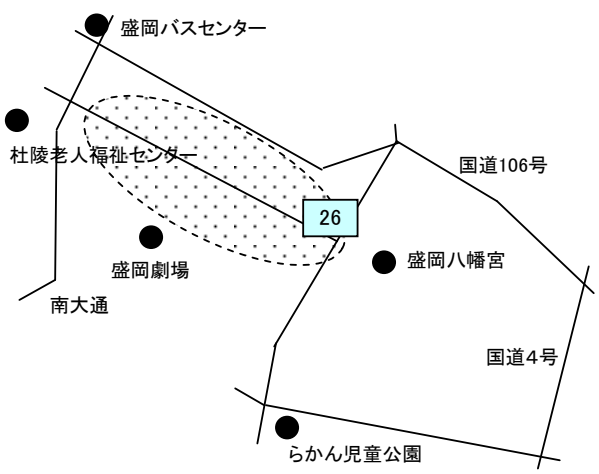
延宝七（一六七九）年八月に八幡宮の最初の御輿渡御が行われ、三日三夜の祭典があった。翌八年から流鏑馬（やぶさめ）を奉納するようになった。八幡宮例祭に城下二三町から山車など練り物が出るようになったのは、宝永六（一七〇九）年からである。八月一日から一六日の祭礼中は隔日で市が立ち、他の町の市を禁じた。

八幡町は宝永の頃から茶屋など飲食店を中心とする歓楽街として発展。明治以後は、花柳界（かりゅうかい）として繁盛した。幡街（ばんがい）と呼ばれ、幡街芸者は芸事の修練でも本町の本街（ほんがい）芸者と互いに競い合った。



（昭和 54(1979)年）

（平成 21(2009)年）　八幡町９番地付近



餌差小路・十三日町

えさしこうじ　じゅうさんにちまち

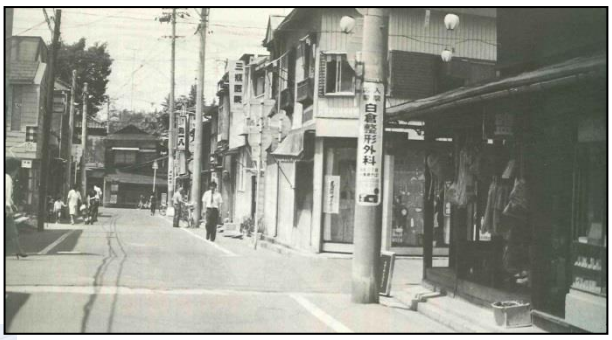
餌差小路は、文字通り御餌差が住んでいたことに由来。鷹の餌にする小鳥を捕獲・飼育する微禄の者が住んでいた。

鷹匠小路には、藩主が鷹狩りに使う鷹を調教する鷹匠が住んでいた。この鷹の必要な餌を調達するのが、御餌差の役であった。

明治九（一八七六）年の明治天皇巡幸に際し菊池金吾邸が行在所（あんざいしょ）となったため、新たに肴町方面から通じる道が造られ、御幸新道（みゆきしんどう）と呼ばれた。明治一四（一八八一）年にも行在所とされ、庭前の松を見馴れ松と命名されたが、明治一七（一八八四）年の盛岡大火でこの松も焼失し、同一九（一八八六）年に松樹を下賜されて植えたことから、賜松園（ししょうえん）と呼ぶようになった。現在は盛岡市杜陵老人福祉センターとなっている。

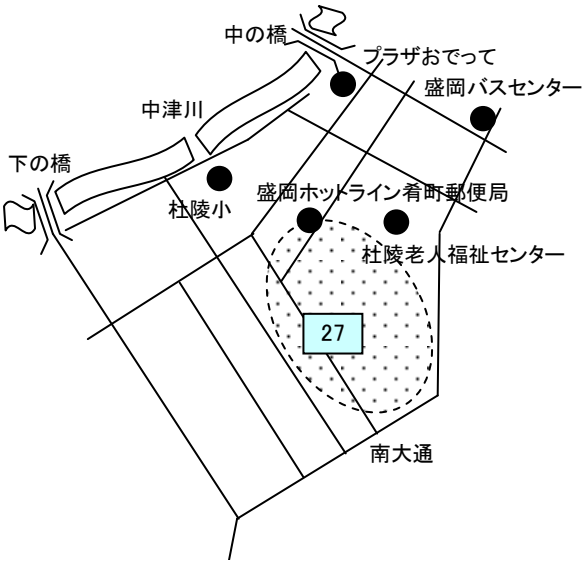
十三日町とは、毎月一三日が市日であったことに由来。新山舟橋・穀町惣門・馬町に近く、旅人の出入りが多く、宿屋が繁昌した。

十三日町に近い外堀の上には鐘楼が立ち、城下河北に時を知らせる「三戸町の時鐘」と並ぶ城下河南の時鐘があった。



（昭和 54(1979)年）

（平成 21(2009)年）　「盛岡ホットライン肴町郵便局」付近



あとがき

昭和五十四年に「あすを築く盛岡市民運動実践協議会」が発行（編集　盛岡市）した「城下盛岡町名由来記」。昭和五十二、五十三年に調査団（団長　吉岡誠氏）に委託して実施した前回調査から三十年余りが経過したこともあり、市は、平成二十年度に盛岡歴史研究所（代表　高橋清明氏）に委託して、説明文に係る再調査を行い、全面的に改訂することとしました。

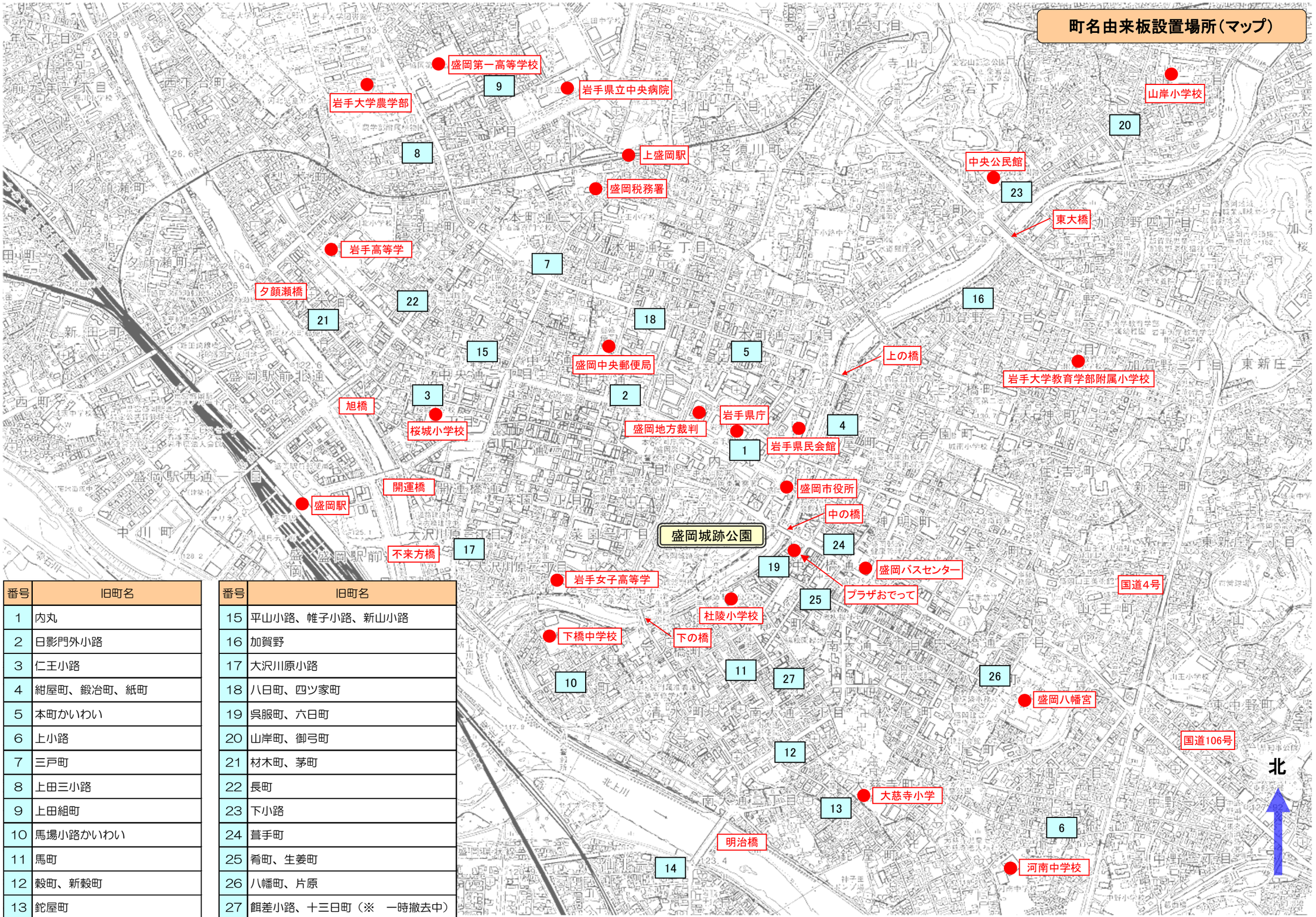
また、今回の調査結果については、盛岡市環境基本条例及び盛岡市自然環境及び歴史的環境保全条例に基づき設置している盛岡市環境審議会の専門委員として、森ノブ氏、佐々木和夫氏、神山仁氏の三名を委嘱して、平成二十一年度に監修作業を行ったものです。

特に、再調査をお引き受けいただきました高橋清明氏については、説明文に係る字数制限等がある中で、平易簡明な表現にするなどの配慮をしていただきました。また、監修に携わっていただきました森ノブ氏、佐々木和夫氏、神山仁氏についても、お忙しいところお集まりいただき、調査結果について議論をしていただきました。献身的に御協力いただきましたこれらの関係者の方々に改めて御礼申しあげます。

平成二十二年二月

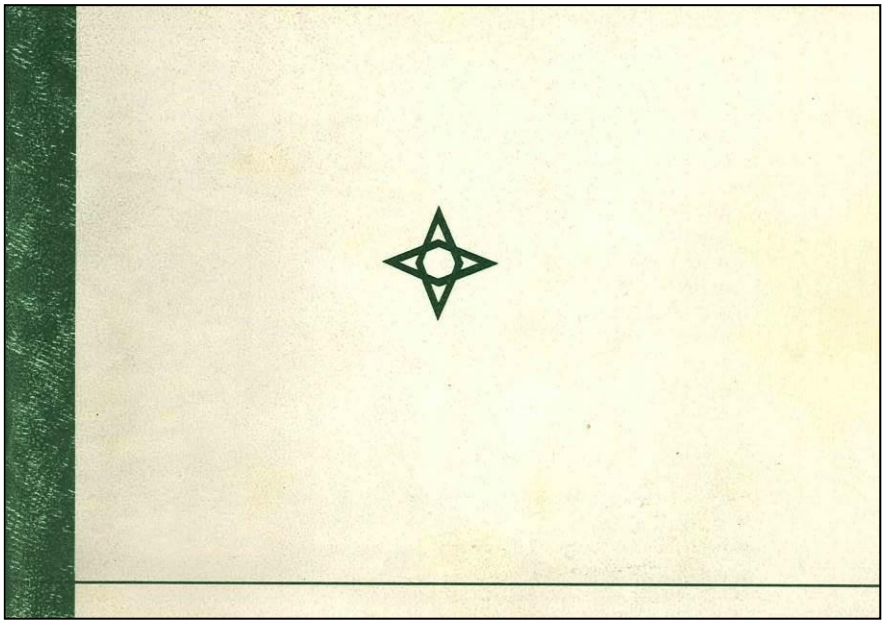
盛岡市環境部環境企画課

町名由来板設置場所（マップ）



番号	旧町名
1	内丸
2	日影門外小路
3	仁王小路
4	紺屋町、鍛冶町、紙町
5	本町かいわい
6	上小路
7	三戸町
8	上田三小路
9	上田組町
10	馬場小路かいわい
11	馬町
12	穀町、新穀町
13	鉈屋町
14	仙北町、青物町

番号	旧町名
15	平山小路、帷子小路、新山小路
16	加賀野
17	大沢川原小路
18	八日町、四ツ家町
19	呉服町、六日町
20	山岸町、御弓町
21	材木町、茅町
22	長町
23	下小路
24	菖手町
25	肴町、生姜町
26	八幡町、片原
27	餌差小路、十三日町（※　一時撤去中）



（昭和 54(1979)年発行の由来記の裏表紙）